

Essay

Sapiarc.com

2017年3月23日(2017-2)

漱石生誕 150 年にちなんで

今年は夏目漱石生誕 150 年に当たる。昨年は没後 100 年だったということもあって、いろいろな記念出版が昨年から続いているようだ。丸善が古くから出している季刊誌「学燈」の春号(Vol.114, No.1)には、「特集 夏目漱石」が組まれていて、19 人もの人たちがいろいろな観点から、漱石について 2 ページの文章を書いている。これだけ多数の人たちに、各 2 ページのものを書いてもらった編集者の努力は大変なものだっただろう。また、学士會会報 2017 年 3 月号(No.923)には、小森陽一東京大学総合文化研究科教授が「没後百年に読みなおす夏目漱石」という題で、日露戦争後、軍国主義に傾いたわが国の風潮に対して、漱石が批判的だったことについて書いている。この点は、漱石のいろいろな作品を少し丁寧に読めば、自然にわかることだ。

私が漱石に関心をもってきたのは、次の 4 つの原因による。

- (1) 私が最初に読んだ小説は『坊っちゃん』で、面白いと思ったこと。(中学生か小学生上級生のころだったと思う。)
- (2) 『三四郎』のはじめの方に出てくる場面が、東大本郷キャンパスの三四郎池のあたりで、私が学生時代から長く過ごした理学部化学科がある場所のすぐ近くで、親しみを覚えたこと。(現在、三四郎池という名称は普通に使われているが、この池の本当の名前は「心字池」だ。江戸時代には、金沢加賀藩の下屋敷があったところで、そこに育徳園という庭園が作られ、その中に「心」の字の形をした池が作られたのだ。ただし、現在の池

は必ずしも「心」の字の形ではないと思う。)

- (3) 『三四郎』には、主人公の三四郎が物理学実験室を見学するときの様子が出てくること。(随筆家としても有名だった寺田寅彦東京帝国大学理科大学物理学教授は、熊本の旧制第五高等学校の学生だったときから、当時同校の英語教授だった漱石と親しくしており、『三四郎』に出てくる「野々宮さん」のモデルは寺田だったと考えられている。漱石は自然科学に関心があったようだ。)
- (4) 「味の素」の発明者として知られる池田菊苗東京帝国大学理科大学化学科教授は、ロンドンに留学中の漱石を訪問して、暫くの間親しくしたこと。(どういう事情で、この 2 人が知り合ったのかは十分にはわかっていないが、ドイツに留学した池田が帰国の途中、漱石と事前に連絡して、訪問し、かなりの期間を親しく過ごした。とくに、約 50 日間、漱石の下宿先に同宿した。しかし、2 人は帰国後とくに親しくしてはいなかったようだ。)

私は、かなりの数の漱石の著作のほかに、漱石について書いた本をいくつか持っている。その中で、上記の「学燈」や「学士會会報」で触れられていないと思われるものについて、書いておこう。Amazon で調べた限りでは、現在、下記の A と B は入手できないが、C, D, E は入手可能である。

(A) 夏目漱石 特装袖珍本『こころ・道草・明暗』三冊セット 岩波書店創業九十周年記念特別復刊 (2003 年)

この三冊セットは、上記のように「特装袖珍本」で、これらの本が最初に出版されたときのものを、あとで縮冊して袖珍本として出版したものを復刊したものだ。本の大きさは現在の新書版に近いので、持ちやすい。字はかなり大きく、その点では読むのに苦勞することはない。しかし、原文の旧かなづかいや今では使われない文字が元のまま出ているので、現在市販されている文庫本などと比較してみると、後者が読みやすくなっていることがわかる。例えば、『ころ』の最初の部分は次のようだ。

『私は其人を常に先生と呼んでいた。だから此處でもただ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取って自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ『先生』と云ひたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。餘所餘所しい頭文字杯はとても使ふ氣にならない。』

現在市販されている集英社文庫の『ころ』では、次のようになっている。

『私はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚る遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字などはとても使う氣にならない。』

なぜ『ころ・道草・明暗』が3冊セットとして出版されたのかは、どこにも書かれていない。『ころ』(438ページ)と『道草』(456ページ)はほぼ同じ厚さだが、『明暗』(973ページ)は前記2冊を合わせたよりも長く、厚さの点では不揃いな形になっている。いずれも硬い箱に納められており、それらが更に2重の箱に入っている。いかにも「特装」という表現のとおりである。おそらく、これらの3冊が選ばれたのは、装丁がとくに良い本だったからではなかろうかと、私は思っている。その点では、

『ころ』は特別で、漱石自身が序に次のように書いている。「装幀の事は今迄専門家にばか

り依頼していたのだが、今度はふとした動機から自分で遣って見る氣になって、箱、表紙、見返し、扉、及び奥附の模様及び題字、朱印、検印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた。」(現在市販されている文庫本には、このような点はすべて無視されている。)表紙には、荀子に関する漢文の書物のなかの一節を書いたものが使われており(誰が書いたものかはわからない)、字は薄い緑色だが、地は朱色に近いもので、全体として、かなり派手な感じがする。見返しには、20個の丸い模様が描かれている。見返しの次のページには、手書きで *ars longa vita brevis* (「芸術は長く人生は短い」を意味するラテン語)と書かれている。本の背には「ころ 漱石著」と書かれており、本文の第1ページも「ころ」で始まっているが、箱の背には「心 夏目漱石著」と書かれている。つまり、漱石にとって、本の題は「ころ」と「心」のどちらでも良かったようだ。

『道草』と『明暗』の装丁は画家津田青楓によるもので、箱、表紙、見返しのいずれにもいろいろな草花を図案化したものが描かれている。

百年以上の昔には、今のように多数の本が次から次への出版されていなかったから、読者はこういう凝った装丁の本をじっくり読んでいたのだらう。羨ましいという気がする。今は、箱入りの本はほとんど出ていないと思う。

(B) 角野喜六著『漱石のロンドン』荒竹出版(1982)

漱石は1900年(明治33年)9月8日に横浜港を出港する船に乗り、パリを経由して、10月28日にロンドンに着いた。帰国時には、神戸を経て、1903年1月24日に東京に戻った。漱石の年齢は、出発時には33歳、帰国時には36歳になったばかりであった。

この本の著者の角野氏は兵庫県立医科大学教授だった人で、「まえがき」で次のように述べている。「二か年間の漱石の留學生活を最もよく伝えるものは「日記」と「書簡」であり、また留學の成果として生まれた作品は、「倫敦

(ロンドン)塔」、「カーライル博物館」、「自転車日記」、「永日小品」の中の「下宿」、「過去の匂ひ」、「暖かい夢」、「霧」、「印象」、「変化」などである。私はこれら「日記」、「書簡」及び「作品」の中に現われるイギリスの風物の写真撮影と、漱石の留學生活の追跡のために昭和四十八年以来五度イギリスを訪れた。本書は私の収録した写真と、新しく発見した事実と資料によって、漱石の留學生活を追体験するための一助として書かれた。漱石研究のために益するところがあれば幸せである。」

この本の内容は、まさに著者が目的としたことそのものであり、漱石の留學生活をことごとくに蘇らせている。しかし、この本の原稿がほぼ完成した時点で、角野氏は急逝された。まことに不幸なことであった。そのため、遺稿を本の形にまとめ、校正などをされたのは角野氏の女婿である谷口吉弘立命館大学教授(現在は名誉教授)であった。谷口氏は私の古くからの知人で、私は、この本を谷口氏から贈られた。

漱石のロンドンでの下宿先は5箇所あったことが知られていたが、角野氏の功績は、3度目の下宿先を探し当てられたことである。この下宿先はロンドン南郊にあったが、2度目の下宿先一家がそこに移り住んだので、漱石はそれに同行したのである。漱石は気に入らなかったもので、次の下宿先に移るつもりであったが、前記の池田菊苗の訪問が迫っていたので、暫くここに留まっていたのだ。そういう事情で、場所はよくわかっていなかった。角野氏は精力的に探索して、ほぼ間違いのないと思われる場所を特定された。

漱石は、文部省から支給された留學費を切り詰めて、本を買い、読むことに専念していた。その結果、神経衰弱になってしまったのだが、買った本の一部のリストが、この本に出ている。買った本は約350冊であるが、このうち漱石が読み通したものが何冊あったかはわかっていない。しかし、これだけの数の本(多くは古本だったようだ)を選んで買ったのは、それだけで大変な仕事だっただろう。

(C) 出口保夫、アンドリュー・ワット編著『漱石のロンドン風景』中公文庫(1995)

漱石が留學した時代のロンドンを、280枚の当時の写真を用いて書いた本で、Bと似た点もあるが、写真が多いので、迫力がある。ヴィクトリア女王の最晩年で、大英帝国の華やか時期だった。ロンドンの市街は既に現在とほとんど同じ形になっていた。漱石は、『倫敦塔』の最初の部分に、「(倫敦塔に)行ったのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよくわからんし、地理などは固(モト)より知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中に抛り出されたような心持ちであった。」と書いているが、まさにそんな感じであったらと思う。

(D) 廣田鋼藏著『化学者 池田菊苗—漱石・旨味・ドイツ—』東京化学同人(1994)

主として池田菊苗について書かれた本だが、ロンドンでの、漱石と池田菊苗との交際についても詳しく書かれている。著者の廣田鋼藏氏は大阪大学理学部化学科教授を勤められた方である。

(E) 夏目鏡子述、松岡讓筆録『漱石の思ひ出 附 漱石年譜』岩波書店(普及版 1929年)

漱石の鏡子夫人が語ったことを女婿の松岡讓が書き取って本にしたもので、松岡は「編録者の言葉」で次のように書いている。「(この本は)未亡人の「思ひ出」であり、又一部分は「見聞録」に過ぎないのでありまして、主として家庭に於ける先生の生活記録であるのですが、(中略)夫人の目に映じた人間漱石の姿が、やさしい真実の魅力のうちに、生々と物語られ伝えられて居るのであります。」内容は、漱石夫妻の結婚以前から漱石の死後にまで及んでおり、64節に分かれている。夫妻が結婚したとき、漱石は29歳、夫人は19歳で、結婚生活は約20年間であった。しかし、書かれていることは極めて多岐にわたっており、よくこれだけのことを語れたものだと驚かされる。それだけ漱石の生活が充実していたのだろう。本と箱の装丁には、上記の、漱石自身が装丁した『こころ』のものがほぼ同じ形で使われており、し

っかりとした造りになっている。私がおもっている本とまったく同じものは現在市販されていないが、似た形の単行本は岩波書店から、文庫本は「漱石の思い出」という題で文春文庫から市販されている。（おわり）